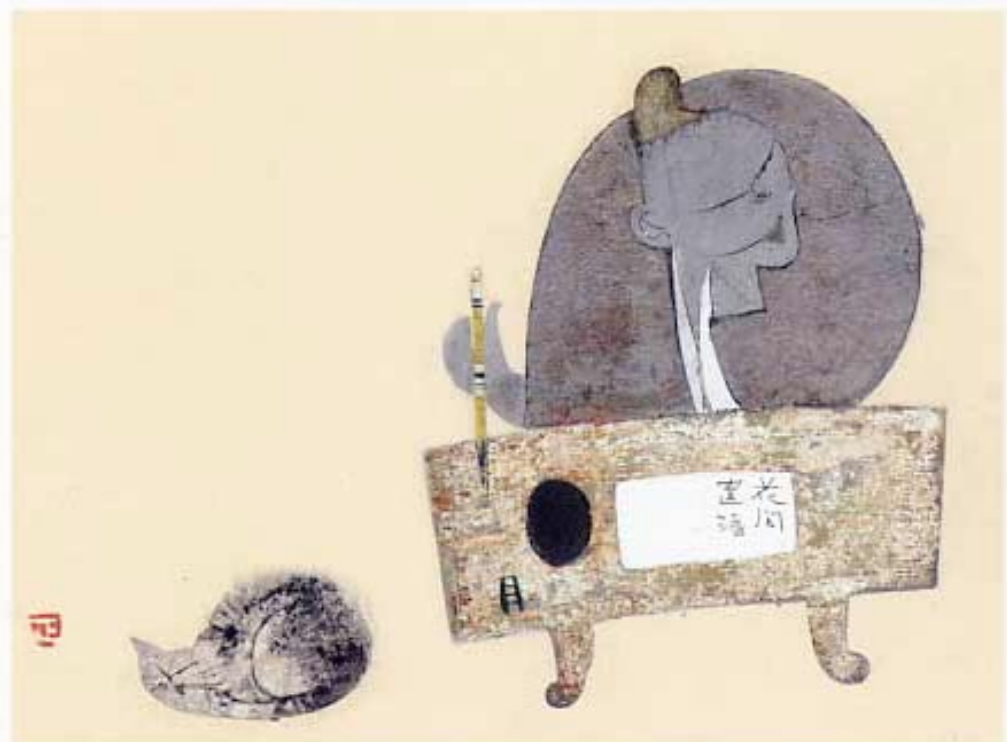


火星



平成19年2月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

煤籠る夫に地球儀ありにけり

門松へひた走りくる沖の波

湖の荒れをうしろに獅子頭

懐より父が追羽根出しにけり

逆光の母が若菜を摘みゐたり
榛の木の影響ならびゐる鋤始
松とれし日うら日おもて歩きけり
遠火事のありしガラスに指の跡
散会のあとの座布団雪くるか
狐火や壁にねんねこ掛かりあり

太白星

柳生千枝子

月洩れて侏儒がころがす木の実かな
木の実落つ夜更は侏儒の森となる
茶の花の白に日当る姑の里
冬バラの小さきを愛す黄を愛す
冬バラの白の冷たさ亡き友よ
終生の友を喪ひ月凍つる
風花の限りなく降る海へ降る

杉浦典子

冬来ると津軽三味線鳴りにけり
あんパンを食べたうなりぬ小春空

冬めくや庭師の脚の下りて来し
顔見世の切符を仕舞ひ忘れぬやう
灯ともして厠の神も留守しをり
千枚漬塩つかむ手に紅さして
橋脚を叩いてをれば日短か

浜口高子

釣具屋の竿の列なす冬の月
日曜の校門前を七五三
はんざきの水を流るる冬菜屑
風垣の破れに冬の滝餅
ぽん菓子の音枯蓮の向かうより
日のおとろふ川べりを這ふ烏瓜
溜池に町の灯にじむ十二月

火星作品

山尾玉藻選

妙法の火床間近き大根畑
豊中廣畑忠明

短日の日の差ししてゐる帽子掛

嵐電のごとりと発車初しぐれ

短日の我も影なり波止釣場

石垣の家に日当る神の留守

封筒に鍵が一本日短か
八幡大山文子

赤松の枝が水の上冬に入る

黄落や檻のうちそと鳥のゐる

百合鷗の水^みの輪^わに鴨の入り来たる

霜の夜の座上座下の煙草盆

地芝居や走り根つとに冷えてきし
神戸深澤鱻

烏瓜手繰ればにほふ焚火跡

仏手柑を愛でて老醜深めたる

蟹宿ののぼりの囲む駅
はんぎきに木霊のかよふ時雨かな
枇杷咲いて白髪殖えし犬の顔
茶の花や大事にされて惚けさうな
真綿負ふ母を疎みし日のありし
無沙汰詫びる肩掛のずれてをり
困のぴたりと止みしおやつどき
冬立つや齒磨きチューブに指のあと
山眠るまなか牛の仔生まれけり
山茶花の垣に顔出す仔牛なり
牧牛の乳房を這へる冬の虻
天は穂に染まると曾爾の芒茶屋
木枯の吹き残したる牧舎の灯
笹鳴の水辺に踏める砂袋
大枯るる土手を男の肩鞆
観音堂へ湯桶運ばる花八ツ手
百畳に入るくるぶしの寒さかな

八幡 波田美智子

宝塚 山田美恵子

宝塚 蘭定かず子

選のあとに

山尾 玉藻

短日の日の差ししてゐる帽子掛

廣畑 忠明

つい見逃しそうな景を、平明な表現で滋味ある詩の世界へ移行させる、それが忠明さんの持ち味である。掲句、「日の差ししてゐる帽子掛」より、そこに掛かる温かそうな帽子や、いつもは掛かっている筈の帽子の不在など、とりどりが思われる。しかし、直ぐに日が昏れて帽子掛も陰れば、そこに感じる内容にも自ずと違いが生じる。詩的空想を膨らませる要として季語「短日」は誠到的確であり、懐の深い作品となっている。

茶の花や大事にされて惚けさうな

波田美智子

ご主人と共にご子息一家と同居、近隣にご息女一家がおられ、曾孫さんに恵まれ、美智子さんはお幸せである。「大事にされて」には無論感謝の思いが籠められているが、それ故の「惚けさうな」の直叙も老人の正直な胸中であろう。このちよつとした哀歎のギャップが人間的で、俳味を生む。「茶の花」がしみじみと良い。

笹鳴の水辺に踏める砂袋

蘭定かず子

「流れ橋」吟行で得られた一句。当日、木津川は大きく濁れ、水辺に「砂袋」が露出していた。「笹鳴」の透明な声を耳に

して、足裏の「砂袋」のごつごつ感を急に実感されたのである。獅子座作品〈笹鳴の谷に水質検査員〉と共に、「笹鳴」が季語として働く分量を心得ている作者である。「吟行では風景を大きく擷んで詠む、もしくは足許を詠む」と、岡本圭岳は説いた。大方の参加者が「流れ橋」自体を詠もうと気色ばむ中、平常心を失われなかつたかず子さんは見事である。

風感じやすき樹樹より紅葉せり

白数 康弘

元より俳句に理屈は無用であり、風に靡き易い細やかな葉の樹樹はいち早く紅葉する、などと解釈してはならない。「風感じやすき」は、作者の詩人としてのこのころの眼が働いた表現であり、秋風にも推移があり、それに鋭敏に順応する樹樹を比喩したものである。何よりも作者自身が「風感じやすき」存在なのである。

紅玉のぼとりと在りぬガラス棚

金澤 明子

掲句の場合の「ぼとり」は、擬音語と言うよりは擬態語として働いている。艶やかで健康的な「紅玉」そのものが、まるで大きな紅の滴のように見えてきて、「ぼとり」に大いに納得する。また、「紅玉」の存在が「ガラス棚」の透明感を一層深いものにしてている。

(以下略)

恒星圈

高尾豊子

みどり児の拳の中の小春かな
堂堂と眠れる赤子龍の玉
沐浴の赤子の拳木の実降る
冬桜男の子ドレスを着せられて
赤ん坊が夢見てをりぬ白兔

城孝子

高松由利子

縁下のいたちのしつぽ冬に入る
蠶螂の枯れて鎌打つ男山
どぶろくの壺に蓋あり初しぐれ
来るはずの人みな来たり冬雲雀
学校の松うつくしき十二月

長椅子の日のある方へ冬の蠅
立冬や受胎告知のある館
橋桁の百へのびゆく枯葎
綿虫や木橋を過ぎるバイク音
きのうより神の帰りし男山

大東由美子

田中英子

追伸の吹きこぼれさう滑子汁
男山ちよつと低めに菰巻ける
セーターの毛糸太らせ堂守は
小春日の何にも聞かぬ人とゐる
冬銀河こらへきれずに零しけり

潮騒の聞えてをりぬ七五三
球場の向うに淡路寒卵
一灯に平らとなりぬ鯛の海
冬没日井堰をまはりぬたるなり
寒さとは飛ぶ鳥の影際立てて

獅子座

山尾玉藻推薦

助口弘子

寄り添うて影動きたる冬の鹿
観音の村の茶の花濡れてぬし
横向きの蛇口あかるき冬の月
竹の葉に時雨近づく御陵道

高橋芳子

夜焚火に棘あるものを放り込む
野外授業の声に囲まる消防車
時雨るるや電化のための床めくる
蛇が尾をひと振りに入る藁ぼつち

竹下幸子

子に乗せて梯子車宙へ文化の日
紅葉落葉浴びつつ猿の走りけり
杜鵑草そんなに仰山咲かずとも
蹠より時移りゆく紅葉山

前田忍

今里満子

綿虫の漂ふ日なり非常口
郵便の届く縁側冬たてり
小春日の動物園のなまけもの
紅葉狩岩から岩へ水折れて
それぞれの羅漢の相に時雨をり
溝までも埋めて銀杏落葉かな
山積の納め火箸や花八ツ手
切干を縁に広げて留守なりし

垣岡暎子

石の上に鉄錆びぬし鴉の晴
金賞の菊の衰ふ日数かな
花八ツ手釣書の写真さし替へる
銅像の裏へ廻りし秋日傘

蘭定かず子

笹鳴の谷に水質検査員
朽野をラジコンヘリの覆り
雨雲のつつかへてゐる木守柿
闇汁会家のどこかのきしと鳴る